



共生社会の実現に向けて その現状と課題

さぼうと21 学習支援室 学習発表会

2010年10月16日(土)

国連大学

エリザベス・ローズ国際会議場

平成22年度 日本郵便年賀寄附金助成事業

【当日配布プログラムより】

本日はさぼうと21学習支援室学習発表会「共生社会の実現に向けて、その現状と課題」にお越しいただき、心から感謝申し上げます。

本日発表をしてくださる受講生、ボランティアの皆様、日ごろよりさぼうと21の活動を支えてくださる皆様、本日の会を実施するにあたりお骨折りくださった国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の方々にも、厚く御礼申し上げます。

社会福祉法人さぼうと21は、縁あって日本で生活している外国出身者の定住と自立の支援を行っている団体です。17年前、認定NPO法人難民を助ける会の国内活動を分離して誕生しました。難民、中国帰国者、日系人等、日本に定住する外国出身者と向き合って活動を続けています。

本日は、毎週土曜日に学習支援室で学ぶ受講生と講師ボランティアの皆さんが日ごろの学習成果を発表し、またそれぞれのお立場からのメッセージを発信していただきます。

今年は第三国定住プログラムがスタートした記念すべき年です。外国出身者がごく普通に私たちの隣人として暮らす社会が訪れています。本日放たれるメッセージは、今後の共生社会の実現に向けて、大きな示唆を与えてくれるものであることを確信しています。



社会福祉法人 さぼうと21

理事長 吹浦 忠正

【第1部】学習支援室受講生からの発表

司会：JA PHA(ジャパ)

1990 年来日。2008 年 2 月、学習支援室で日本語の勉強を始める。現在は、5 歳になる日本生まれのブン君と共に通学中。日本語能力試験 N 1 合格を目指している。

【司会者】



皆さんこんにちは。第一部の学習発表会の司会をさせていただきます、ジャパと申します。私も学習支援室で勉強をしている一人です。現在学習支援室では 50 名以上の外国出身者が勉強しています。第 1 部はその中から 5 名の者が発表させていただきます。このように場で司会をするのは初めてのことで、とっても緊張していますが、どうぞよろしくお願いいたします。

では、早速発表に移りたいと思います。発表の一番目は、メヴェェさん。タイトルは「マイ ブログ」です。メヴェェさん、それからメヴェェさんのパソコンの先生、石井先生、よろしくお願いいたします。

【発表1・メヴェェさん】

MYINT MYINT KHIN(メヴェェ)

1994 年来日。学習支援室に通っていた長男レオン君の送り迎えをするうちに、パソコン学習に強い関心をもつようになり、ご自身も学習支援室の受講生となった。

(石井) 皆様こんにちは、ボランティアの石井と申します。メヴェェさんは今年の春ごろからサポート 21 で毎週パソコンの勉強をしています。最近ではブログを始めました。今日はそのブログについて発表してくださいませ。それではメヴェェさん、よろしくお願いいたします。

(メヴェェ) 皆様こんにちは。私は先ほど紹介されたメヴェェと申します。旧ビルマ、現在ミャンマーという国から来ました。今日は皆さんの前でこうして発表する機会を得ることができ、大変嬉しく思います。こちらの大学の関係者の方、さぽうと 21 の皆様、本日来て下さった皆様方、本当にありがとうございます。私は、さぽうと 21 でパソコンの勉強を始めて今、半年になりました。パソコンについてはタイピングから始めて、メールやインターネットの使い方を学び、今はブログが書けるようになるまでになりました。今まで上達できたことを、さぽうと 21 の皆様と、いつも分かりやすいように教えてくれた私の石井先生に、本当に心から感謝したいと思います。今日は私が書いたブログについてご紹介したいと思います。



皆様、こちらをご覧ください。私のブログのタイトルは「Burma's Traditional Foods」です。皆さんに、ブログに伝わるように上手ではありませんが、英語と日本語で書いてあります。今、皆さんがご覧になっているブログは私が初めて書いたブログです。このブログの内容は、私の故郷の思い出っぱいの「タマネ」というおやつスイーツです。まず、このおやつのことをちょっとご紹介したいと思います。

私の国、ビルマでは2月に入るとこの時採られたもち米を使って作った「タマネ祭り」があります。250年前から、毎年行われる伝統的なお祭りですね。このお祭りには子供から大人まで参加しています。音楽や踊りで参加している人もいっぱいいます。たくさんの人たちは一つの心になって、特別なお祭りですね。ビルマ人皆が愛されている特別なおやつといっても間違いのないと思います。お味の方もシンプルな塩味で、まろやかな香りがたまらなく、食べた後に生姜の水分が体の心まで温めてくれて、これからの寒い時期にぴったり合うおやつだと思います。ブログには詳しい作り方が載せてありますので、ぜひ、参考にして作ってみてはいかがでしょうか。

このブログの後にも更新したブログもちょっとありますので、ぜひ自宅に帰ったら今のタイトルで検索してみてください。これからもブログをもっと頑張って続けたいと思います。特に石井先生みたいに人に教えられるようになるまで、パソコンの勉強を頑張って続けたいと思います。これで私の発表を終わります。

ご清聴、ありがとうございました。

【司会者】

皆さん、パソコンの勉強は楽しそうですね。

続いて、トンさんと、トンさんの日本語の先生、千葉先生、よろしくお願い致します。

【発表2・トンさん】

KAM KHAN THAWN(トン)

1995年来日。長男のC君が小学校に入学した頃、一念発起して漢字学習を始める決意をし、学習支援室での勉強を始める。現在は、奥様のMさん、長男C君、長女Eちゃんの4人で学習支援室に通っている。

(千葉) ボランティア講師の千葉と申します。学習支援室にはご家族でいらしている方がたくさんいまして、トンさんもそのような方々のお一人です。今日はあまり聞くことのない、親御さんの気持ちを聞いてみたいと思います。トンさんはお子さんが2人いらっしゃるんですけども、2人のお子さんに向けて、ビルマ語のお手紙を読んでもらいます。トンさん、お願いします。



(トン) 皆さん、こんにちは。私はビルマのチン民族です。名前はカムカントンと言います。1995年に日本へやって来ました。家族4人で生活しています。家族4人を紹介

(以下日本語原稿)

君たちがこの平和な日本できちんと勉強できることを大変うれしく思っています。君たちが学校でしっかり学べば、必ずや立派な人間になれると父は信じています。そうなるように父も母も精一杯応援します。

父も母も母国ビルマの政治状況が不安定なことや経済的な困難のせいで、勉強をしたくてもできませんでした。だから、君たちにはぜひとも学問を身につけてほしいのです。いつの日か君たちが学問・知識を身につけ、日本の国と国民のために役に立つ人間になってくれると信じています。

また、母国ビルマとビルマの諸民族のためにも、日本で学んだ学問・知識を有効に生かすような活動をし、常に多くの人々の幸せを念頭において働いてくれることを願っています。

父 カムカントン Kam Khan Thawn

【司会者】

私も5歳の息子がいますから、お気持ち、とってもよく分かります。次は、カラヤさんとカラヤさんの日本語の先生、荒川先生、よろしくお願い致します。

【発表3・カラヤさん】

KHIN KALYAR WIN(カラヤ)

1999年来日。2005年9月より学習支援室に通っている。
以来、ほとんど休むことなく通学を続け、日本語の力を着実に伸ばしている。

(荒川) 皆様、こんにちは。カラヤさんとは3年半以上前から一緒に日本語を勉強しています。カラヤさんは日本の文化に関心が深く、また、特に漢字の習得に大変熱心です。今日は「日本語の学習によって広がった手芸の世界」という題で発表をしていただきます。カラヤさんどうぞ。



(カラヤ) 皆さん、こんにちは。私は子供の時、お母さんやお姉さんに布で人形の服の作り方を習いました。中学生の時、祖母に「タテング」という編み物を習いました。(それは、タテングという編み物です。)

妹に刺繍を習いました。高校生の時、お母さんが亡くなりました。私は大学で動物学を勉強しましたが、卒業してから、若者の洋服を作り始めました。でも、お母さんが亡くなる前に、服の作り方を習ってはいませんでした。母国にデザインの専門学校がありません。外国のカタログや手持ちの服に自分のオリジナリティを加えて作りました。そして、兄弟や友達のいくつかの服を作ってから、3年後に「Just One」という名前を登録して、起業しました。日本に来てからもその仕事を続けました。

今、私は生活のために仕方なく興味がない仕事をしています。

ある日、夫と一緒に紀伊国屋に行きました。いろいろな分野でたくさんの本が並んでいました。手芸のところに、母国で見たことがない本がありました。専門家が作品について図案や説明書を詳しくしているのです。役に立つ本ですし、とても買いたかったです。でもあきらめました。なぜなら全部日本語で書いてあるのです。それから日本語を勉強しようと決心しました。日本語が勉強できる教室を見つけ、早速行きました。先生が、新聞を読みました。日本語がまったくわからない私はちんぷんかんぷんでした。2回行って、やめました。

それから、さぼうと 21 で勉強する機会がありました。先生方が教えてくださって、今、私は日本語に自信がつき、生活する上でも言葉で困ったことがそんなにありません。現在、本を読んで、作ったことのないいろいろなバッグを作っています。バッグの本を買ったとき、一つのチラシをもらいました。一つのチラシに通信講座で勉強できることが書いてありました。付いている葉書を送って詳しい説明書をもらいました。

今、通信でパッチワークを勉強しています。もういくつかの作品もできました。本屋で、パッチワークの本とパッチワークに関連するキルトの本を買ってきて、キルト作品も作っています。今は、説明書も材料の種類や特徴もわかります。全部日本語で書いてあって、以前の本を買うのをあきらめた私ではありません。

私は好きなことをすると肉体的にも精神的にも元気が出ます。これは日本語をしっかり勉強したおかげです。いつも私を支えてくださっている矢崎先生、漢字を初めて教えてくださった中山先生、もうお辞めになった松村先生、いろいろな場面で困っていることについて私が満足するまで答えてくださる現在の担当荒川先生、私の夢を実現する「レンタルボックス」ということを教えてくださった早福先生、さぼうと 21 の関係の方々、心から感謝しています。

さぼうと 21 は私にとって二番目のお母さんと言えます。皆さんご清聴ありがとうございました。

【司会者】

すばらしい作品ですね。入口の近くに作品を置いておいてくださるそうですので、皆さん、後でゆっくりご覧ください。

続いて英語での発表です。T・Kさん、早福先生、よろしくお願い致します。

【発表4・T・Kさん】

T・K

現在、定時制高校4年生。大学進学を目指して勉強に励んでいる。現在の定時制高校に入学した年から、英語とパソコンの勉強のために学習支援室に通うようになった。英語もパソコンも、ほぼゼロに近い状態からの学習開始だった。

(早福) こんにちは。早福と申します。今日はT・Kさんが英語でスピーチをいたします。彼女とは、彼女が定時制高校に入学した3年半くらい前から、英語と一緒に勉強しています。今日は「One step to the world」という題でスピーチをします。

国では英語を勉強した経験はなかった、ほとんどゼロからのスタートでした。昼間は会社で仕事をし、夜は学校に通い、そして学校では国際交流部の部長さんという立場での活躍も大変忙しくて、時間がない中、何とかここまでがんばりました。どうぞ、聞いてください

One step to the world

T. K.

Now I am working as a full-time employee, going to school at night and studying English and computer at Support 21 every Saturday. Also I am preparing to go to college. I have made up my mind that I would continue studying English to master it.

Why do I stick with English and keep up my efforts even though I'm too busy and it's very difficult to spend days on schedule?

It's because English is a very important key of the door to the world.

In my childhood I lived with my mother in a small village in the mountains. When I entered a primary school, we moved to a town and my mother remarried. And one year later I had a little brother. At first I was very happy. I had a family.

But soon when my mother was not at home, my father-in-law began to get angry with me for little things, used violence on me, and he didn't give me meals. My mother was hardly at home, so only I did the housework and took care of my brother all day.

Sometimes I couldn't go to school. At that time I was always nervous and uneasy. I was very angry with my mother, and I often regretted having been born. When I was old enough to enter a junior high school, I wasn't allowed

to go to school because my father thought that girls don't need to study.

Though the conditions were terrible, I challenged myself in sports, but it too, resulted in failure. Even though I got very good marks, I was not admitted because I am of mixed blood, my mother was Japanese. Everything seemed to be going wrong, so I decided to leave my country and find a new home in a foreign country.

It was Japan. I came in 2004.

In Japan, I feel at ease and am free to challenge various things. The more efforts I make, the better results I have. Now I know that, no matter what, I can take chances, learn from them, and grow.

When I entered the high school, night course, I sincerely wanted to study English. It was the language I hadn't ever studied in my country.

One day I watched a TV program, a documentary film. The program was about a Japanese man who supported the people in need in the villages without roads, water supply or electric power in Nepal. While watching the villagers and children, I remembered my childhood and my heart ached. At the same time I was deeply moved by his activities and I also wanted to help those people, especially children.

In summer of 2008, by chance, to my great joy, I could meet that man I had seen on TV, Mr. Kakimi. I asked him what I could do for the people in need. I said "I want to support the poor children like me during childhood. I want to continue supporting them as long as possible." Then Mr. Kakimi suggested building an English school in Nepal where the ability to use English is an advantage in getting higher education and finding good jobs. Besides English is my goal, too.

I readily agreed and soon the villagers began building the school together in Nepal, and I began saving the money needed in Japan.

In summer of 2009 the new school started. I sometimes received the letters and photos from Nepal. Every time I read a letter, my school had gotten bigger and better, and photos of the children were a great

encouragement. Now about 200 children are studying at the school.

At last, this December, I'm going to visit my school. I want to meet the children and talk with them in English. I'm looking forward to the tour very much.

English connected me to the children in far Nepal and that stimulates me even more to continue to study English and learn a lot about the world. By observing the world we can know better what we are, what we should do, and how we can change ourselves into what we hope to become.

I want to live a better life. .

The English school in Nepal is my one step to the world. English is essential to the life I have chosen.

Thank you.

(日本語訳)

世界への第一歩

T. K.

私は今、正社員として働きながら、夜間高校に通い、土曜日はさぼると21で英語とパソコンを勉強しています。そして、さらに大学進学を目指しています。日本に来て初めて学び始めた英語の勉強もずっと続ける覚悟でいます。忙しくて学校を続けることさえ難しい中、なぜ私はここまでがんばって英語を勉強したいと思っているのでしょうか。

それは、英語が世界へのドアを開いてくれる大事な鍵だからです。

幼い頃、私は日本人の母と二人で、山奥の村で生活をしていました。小学校に入る年になって、山を出て、町での暮らしが始まり、母は再婚しました。それから1年たった頃に弟が生まれ、やっと私にも家族ができ、とても嬉しかったのですが、まもなく義父は母がいなくなると、くだらないことで私を怒り、暴力をふるい、ご飯もくれなくなりました。また、母はほとんど家にいませんでしたので、私は家の仕事と弟の世話ばかりすることになりました。学校に行かれない日もありました。

その頃はいつも不安でぴりぴりしていました。母を恨み、生まれてこなければよかったと思ったこともたくさんあります。そして、中学校に入る年齢になっても、中学校に行くことができませんでした。義父は、女の子は学校に行かなくてもいいという考えだったからです。

厳しい状況でしたが、私はスポーツに打ちこみました。でも、たとえスポーツでいい成績をあげても、日本人の血がまじっている、母が日本人であるというだけの理由で、賞をもらうことはできませんでした。何もかも上手くいかず、私は一人でこの国を出て、外国に行こうと決心しました。

それが日本でした。2006年のことです。

日本に来てからは、心が落ち着いていろいろなことにチャレンジしています。がんばれば、がんばった分の結果がでます。私にもチャンスがあり、自分を変えていくことができると思えるようになりました。そして、夜間高校に入ってから、私はしっかりと英語も勉強したいと思うようになりました。国では勉強することのできなかった言語です。

そんなある日、テレビであるドキュメンタリー番組を見ました。ある日本人の男性が道路も水も電気も通っていないネパールの山奥で村の人々のために一生懸命支援活動をしていました。子ども達や村の様子を見て、心が痛みました。自分の子どもの頃を思い出したからです。そして同時に、その男性の活動に深く感動をおぼえました。私も困っている人、特に子ども達を助けたいと思いました。

2008年の夏、とてもうれしいことに、私の願いがかなって、私はテレビの日本人の男性、垣見さんに会うことができました。私は垣見さんに、自分は困っている人々のために何ができるかがいました。「できれば子ども時代の私と同じような境遇にある子ども達のために何かしたい」「できるだけ長く支援を続けたい」という私の思いをお話しました。すると、垣見さんは英語の学校をつくることを提案してくださいました。ネパールでは英語ができると、進学や就職に有利なのだそうです。しかも、私も勉強中の英語です。

さっそく、ネパールの村では地元の方々が力をあわせて、学校づくりを始め、私は学校の校舎作りに必要なお金を用意するために、日本で貯金を始めました。

2009年の夏、学校の授業が始まりました。時々ネパールから手紙や写真が来るのですが、受け取る度に学校は大きく立派になっていきました。かわいらしい子ども達の写真は大きな励みでした。現在約200人の子ども達がそこで勉強しています。

今年の12月にはその学校を見に行きます。子ども達に会い、私は彼らと英語で話すのです。ツアーがとても楽しみです。

英語が、遠いネパールの子供達と私を結び付けてくれました。その出会いが、これからは英語を学び続け、世界についてたくさん学びたいと思う気持ちをさらに強くしてくれました。世界を見たい。そして自分を見直したい。何をすべきか考え、自分を変えていきたい。しっかり自分の人生を歩んでいきたいと思えます。

ネパールの学校は、私にとって世界への第一歩であり、英語は世界へ羽ばたいていくのになくてはならないものなのです。

【司会者】

ありがとうございました。では、最後の発表となります。モーさん、脇田先生、お願いいたします。

【発表5・モーさん】

KYAW MOE TINT(モー)

1992年にミャンマーを出国。1994年9月に船で和歌山に上陸。忙しいスケジュールの合間をぬって、支援室への通学を続けている。日本語能力試験 N2 合格を目指す奥様のマイさんも学習支援室で勉強中。

(脇田) こんにちは。脇田と申します。モーさんはとても仕事などで忙しい中、毎週、支援室に通って、日本語の勉強をしています。特にスピーチが好きなので、お話したいことが沢山あると思うのですが、今日は限られた時間の中、モーさんらしく発表してくれると思います。それではよろしく願いいたします。

(モー) 皆さん、こんにちは。私の名前はチョー・モー・テです。今、先生たちも私たちも、結構プレッシャーがかかって、緊張しています。でも、今まで、勉強していたことは今日の発表会につながると思います。だから、私の発表をします。

私は、難民として日本で暮らしています。ビルマ出身で、ビルマを出たのは、当時22歳で大学1年生でした。私の大学はラングーン大学です。大学では法律を勉強していました。私の将来の夢、私の夢は弁護士になることでした。

でも、夢はかないませんでした。今私が思っていた夢と現実がちがいます。

でも、私には2つの夢はまだあります。1つは、母国が自由になることです。もう1つは、ビルマの子供たちが教育を受けられることです。

今、現在、3つの仕事をしています。あと、家では laser engraving で小さいビジネスをホームビジネスとして、自分でしています。

私は毎日朝5時半に起きて仕事に行きます。朝起きたら、最初自分が思っていたことは、「あ～、今日も生きてたね、よかったね、神様ありがとうございます。」それから、私の一日が始まります。そして、家に帰るのは夜12時です。1日働く時間は13時間。自分でやっているビジネスは時間が決まっていません。

本当は疲れているので土曜日には休みたいと思っています。でも、さぽうと21に日本語を勉強しに行きます。

なぜ、私のせっかくの休みに、さぽうと21に行って、日本語を勉強に行くのでしょうか。それは、勉強すれば、心も体も強くなるためです。自分で自分を磨くためです。日本の歴史でも、ビルマの歴史でも刀はよく使っています。自分で刀のようだと思います。危ないことがあったら、刀で自分を守り、攻撃を受けて、戦うときは刀を使います。でも、磨いていなければ、その刀は使えません。さぽうと21で勉強する時間は、私にとって特別な世界です。

私は難民ですが、難民としては恵まれています。クーラーをかけている教室やきれい



な机を使って勉強をしています。難民キャンプの中で生活をしている難民の人たちやビルマにいる子供たちは、電気がなく、きれいでもない机を使って勉強しています。難民キャンプの建物は木で作られているので、寒い季節は風が入ってきますし、暑い季節はとても暑いです。同じ難民ですけれど、事情はちがいます。

なぜ、違いますか。深く深く自分で考えていけば、いろんな質問が出てきました。

生まれてから死ぬまで、人生は短いです。人生というものはどういうものですか。人生の意味は人それぞれちがいます。私にとって、あなたにとって、人生というものはどういうものですか。

朝起きて顔を洗って、歯を磨いて、仕事に行って働いて、家に帰ってお風呂に入って、寝、そういう同じことを繰り返すのが人生ですか。おしゃれな服を着て、買い物をして、おいしいものを食べることが人生ですか。

私は、ビルマの子供たちが教育を受けられるよう、サポートをするために、活動をしています。そしてビルマの国が変わるために活動をしています。子供たちが夢を持てるように、勉強をしてもらいたいです。ビルマには勉強をしたいと思っている子供たちがたくさんいます。

ビルマの明るい未来のために、子供たちに勉強してほしいです。教育は私たちが歩く道を照らす明かりのようなものだと思います。教育は花を育てるのと同じです。その意味では、さぼうと21の先生たちは花を育ててくれています。先生たちは、自分の時間やお金や気持ちをこめて花を育ててくれています。花を育てるには何が必要でしょうか。

このハートが必要です。

皆さん、花を育てたことがありますか。きれいな花になるには、種から気持ちをこめて育てなければ、きれいな花は育ちません。

さぼうと21には、子供から年配の方までいるので、本当にカラフルな花が咲いています。きれいな庭です。

最後に、先生たちに「いつもありがとうございます」という言葉を、この場から言います。

先生たち、ありがとうございます。

【司会者】

モーさん、ありがとうございました。以上で、発表は全て終わりました。マイクを高橋さんにお返しします。

(高橋) 発表者の皆さん、ジャパさん、ありがとうございました。

では、ここで、本日のゲストの一人、さぼうと21の評議員でもあり、文化庁の文化審議会会長でもいらっしゃいます西原鈴子先生にご講評をお願いしたいと思います。また、先生のお話は、田辺寿夫先生が、ビルマ語に通訳してくださいます。田辺先生のこ

とは、ビルマの方々が、よくご存知のことかと思いますが、ビルマ語のことだけではなく、ビルマの事情にも精通されたジャーナリストです。それでは、西原先生、田辺先生、よろしくお願いいたします。

【第一部・講評・西原鈴子先生】

西原 鈴子(にしはら すずこ)

文化庁文化審議会会長。元東京女子大学現代文化学部教授。元日本語教育学会会長。社会福祉法人さぼうと21評議員。

田辺 寿夫(たなべ ひさお)

大阪外国語大ビルマ語科卒。NHK 国際局ビルマ語班に長く勤めた。現在もビルマ語の通訳、翻訳に携わる。ビルマ人からは「シュエバ」と呼ばれている。

(田辺) (*ビルマ語で一言)

(西原) …というのはわからなかったのですけども……………。

(田辺) 決して、これがいい、あれがいいという点数をつけるということではなくて、西原先生がお感じになったことを、これから皆さんに話していただきます、という風に言いました。

(西原) わかりました。その通りです。素晴らしいご発表、それから司会も素晴らしかったと思います。こういうようなお話を聞かせていただいたことをまず、感謝します。

お話を伺っていて学んでいられることも幾つかありましたし、それから学ぶことになった動機も沢山あったというふうに見えました。

たとえば、メヴェさんは IT 技術を学びたいという動機でした。

トンさんは息子さんに勉強を教えたいということから学習が始まりました。

カラヤさんは手芸の本を読みたいと思ったそうです。

Tさんは世界に羽ばたくための道具として英語を手に入れたいと思われましたね。

最後にお話くださったモーさんは、ミャンマーの明るい未来のためにということで日本語も勉強していらっしゃる。

素晴らしいと思いましたがご自分がそれぞれ社会と繋がること、そして、他の人のために貢献すること、それが共通の目標になっているということです。

言葉は社会生活をする上に、とても大切な道具です。と同時に、言葉を使うことによってエンパワメントという用語がありますけれども、自立した個人となり社会生活を充実させる、そういう意味でも言葉が大切です。

その意味で、これからも今していらっしゃる努力をぜひお続けになり、それぞれのエンパワメントを成し遂げていただきたいと思います。

言葉の勉強は続けることが非常に難しい。毎日毎日大変ですし、社会生活の中で、「土曜日に、そこに行く」ということだけでも言葉の勉強はとても難しいと思います。

でも、目標から目を逸らさずに今の辛い一日一日ですが、耐えていって頂きたいと心から願っております。

最後に、その夢の実現を毎日、毎週助けてくださっているさぼうと21の学習支援室の先生方、また関わっていらっしゃる全ての方に、私としても、感謝したいと思います。

田辺先生も、ありがとうございました。

(高橋) 西原先生、田辺先生、どうもありがとうございました。(中略) 休憩後、さぼうと21の通学生とボランティアの混成チームで合唱を披露させていただきますが、休憩時間中にその練習をスクリーンに映し出す予定ですので、どうぞそちらもご覧くださいませ。



【合唱】

合唱指導：BIGBELL (TAKAO・DAISUKE)

BIGBELL(TAKAO & DAISUKE)

2台のグランドピアノを重ねて弾き合い歌い合う他にはないスタイルで幅広い年齢層に支持される男性デュオ。2010年7月より、月に1回、さぼうと21学習支援室の受講生・ボランティアの混合チームに、ボランティアで合唱指導をしてくださっている。

(TAKAO) 皆様、こんにちは。人づてでご縁がありまして、さぼうと21のお手伝いをさ

せていただけることになりました。僕たち、専門は作曲であり、ピアノであり、歌であるという、ミュージシャンなんですけども、何かお手伝いをというところで矢崎さんはじめ、ご相談したところ、合唱がいいんじゃないか、ということで、まっ、あの、うまい下手は別にして、聴いていただければと。皆さん、本当に、自分たちの発表というより、自分たちのストレス解消ということでやっていることもあったかと思いますが、楽しくやれたと思います。

合唱の前に、僕たちのオリジナル曲で、今日、お集まりの皆様に合わせているんじゃないかな、という曲があるので、1曲だけ聞いてください。

曲目：「世界を照らすあなたの光」

「夜空ノムコウ」

（ラッシー）最初の曲は「世界を照らすあなたの光」です。ただ今の曲は「夜空ノムコウ」でした。私たちは毎月1回、希望者で合唱の練習をしています。私たちの合唱の先生はBIGBELLさんです。」タカオさんと、ダイスケさん。後ろでピアノを弾いています。何も合唱のことを知らない私たちですが、先生たちはいつも、優しく指導してくださっています。本当にいつもありがとうございます。

では、もう一曲、「翼を下さい」みんなで歌います。皆様、聴いてください。

曲目：「翼をください」

（会場より）ブラボー！ ブラボー！ ・ ・ ・ ・ ・ アンコール！



【第二部】

矢崎 : 今日の一番の大きな課題が今の合唱でしたので、もう無事に終わって半分以上終わったような気持ちになっていますけれども、これからこちらにおそろいのパネリストさんにいろいろなお話をいただければと思っております。

第2部のほうの進行をさせていただきます学習支援室でコーディネーターをしております、矢崎理恵と申します。よろしく申し上げます。

実は、皆さんの発表が素晴らしくてどんどん時間が押しておりますので、早速はじめさせていただきたいと思います。

まず、今日お揃いの4人の方にどのような形で学習支援室、さぼうと21の学習支援室とどのようにかわりを持つようになったかというご紹介をしていただきながら、ご自身の自己紹介もしていただきながらご自身の自己紹介という形をお願いしたいと思います。

では、一番新米ですね、サポート21の原さんをお願いします。

原 克利(はら かつとし)

普段は IT システムの設計を行うシステムエンジニア。社内のボランティア募集でさぼうと21の活動を知り、東京勤務に異動となった2009年5月より、学習支援室のボランティア活動に参加。主に小中学生の学習支援にあたる。

原 : 初めまして、原克利と申します。普段 SE として IT、コンピュータのシステムの設定などを行っているのですが、会社のボランティアのプログラムで紹介していただいて、実際にお伺いして、今の土曜日の学習支援室のボランティア講師を新米ながらやらせて頂いております。



矢崎 : 最初にいらっしゃった時には、何か自分に何かできることだろうかと不安をお持ちだったと聞いていますが、いかがですか。

原 : 矢崎さんにご紹介していただいたのでそういう雰囲気が出たと思うのですが、確かにどういう形でお力になれるかということもわからなかったので、お話を聞きながら、やってみたいなと思いながら、ただ、初日の段階から、朗読での聞き込みとか、ガイドブックの綴じ込みとか、いろいろなことをやらせていただいて、知らない言葉にも触れたりした中で、できる範囲でやればなということで、始めさせていただきました。

矢崎 : はい、さぼうと21では日本人の方が外国出身の方のお手伝いをするだけなのではなくて、ボランティアさん同士でも助け合いも随分行われていますし、外国出身の勉強に来ている方からいろいろのこと私たちも教わっていますけれども、一番新米という風に申し上げました、原さんですが、一番古くからお付き合いのある越路さん、お願いします。

越路 美唯(こしじ みい)

1990年にベトナムより来日。当時、小学校6年生。現在の学習支援室の前身である「ゆうあい塾」の学生でもあった。アメリカ、ベトナムにも留学。2009年12月より、学習支援室でのボランティア活動に加わる。

越路 : 越路美唯と申します。もともと、「難民を助ける会」の支援生でしたんですけれども、小学校6年生のときに日本に来て、ここで日本語を教えていただいて、最近、去年から、さぼうと21で教える側になりました。

矢崎 : どこの国からいらっしゃったのでしょうか。

越路 : ベトナムです。

矢崎 : はい、今越路さんというお名前はやはり(ベトナムと関係があるのですか)

越路 : はい、ベトナムの道で越路という苗字を(日本人の知り合いに)つけていただきました。

矢崎 : そうですね、漢字の最初の越すという字はベトナムをあらわす漢字ですかね。そのお名前をお持ちということで。
小学校6年生のときに、その当時は日本語は全然できなかったのですか。

越路 : はい、全くできなくて大変でした。

矢崎 : ボランティアをしようとなったきっかけというのをもう少し詳しく教えていただけますか。

越路 : そうですね、小6からずっと日本にいまして、そのまま大学に進学し、就職して、普通の社会人の生活に慣れて、ちょっと友達ボランティア(活動)の手伝いをしたきっかけで、その時に日本に来たばかりのベトナム人の人たちと会って、ふっと自分の昔のことを思い出して、何かできることはないかなと思ひまして、以前お世話になっていた難民助ける会に連絡して、今があります。

矢崎 : はい、ありがとうございます。
続いて、お隣のセシリアさん、お願いできますか。



KITAMURA CECILIA MIRANDA(セシリア)

1990年フィリピンより来日。2人のお子さんが社会人となったのを機に、以前から希望していた日本語の学習を始める。日本語能力試験2級に合格。学習支援室には、2007年5月から2008年11月まで通学し、日本語とパソコンの学習に励む。昨年初孫誕生。

セシリア：こんにちは、北村セシリアと申します。

フィリピンから来ました。日本に来てもう20年になります。その間に日本人の男性と結婚しましたが、今はバツイチです。まだ独身です。



矢崎：（笑）でもお孫さんが誕生したんですね。

セシリア：はい、そうです。来月は1才になります。で、これまでいろいろボランティア（の方）達とか、友達と助け合いながら生活したんですが、仕事は、米軍センターでフルタイムで働いてます。この仕事はもう16年になりました。

それから、さぼうと21には3年半ぐらい前からお世話になっております。

パソコンや、日本語の文法を教えていただいてとても助かっています。

これから色々活動に参加できればいいなと思いますので、これからもよろしくお願ひします。

矢崎：確かセシリアさんはパソコンでエクセルの勉強をしたあとに、団地の会計係りを引き受けられたんですね。

セシリア：そうです。実は私は都営住宅に住んでいますが、住んでいる人たちが皆で交代で係りになって、担当を回しています。

その時私が係りになったので、とても大変だったんですね。やはり、お金のことだから、あまり人に疑われたくないからと思って、もっとやっぱり正しい計算とかを皆に見せたいと思ったのです。その時、守屋先生にとってもお世話になりました。

エクセルのやり方をはじめて教わった時、あー、面白いなと思いました。すごく助かったんです。

矢崎：今、さぼうと21に通っていないですけども、お勤めになっている米軍センターでまだ日本語の勉強は続けてらっしゃいますよね。

セシリア：やはり日本語の勉強は、とても私の生活に必要なだと思います。できるだけ、忘れないように、日本語の勉強は2年間、日本語学校にも通っていましたが、その中でさぼうと21にも1年半お世話になっていました。で、やはり、その覚えたことを無駄にしないためにも今会社で日本語の勉強も続けてます。

矢崎：では、すみません、お待たせしました。チンカイさん、お願いします。

MA LIA MANG CING KHAI(チンカイ)

1992年ミャンマーより来日。2007年、都立職業訓練校入学準備のために学習支援室通学を開始。2010年3月に卒業し、正社員として日本の会社に就職。現在も1人息子のサム君と学習支援室に通学している。2008年日本語能力試験1級合格。

チンカイ：皆さん、こんにちは。私は、ビルマ出身、チン民族のマーリアマンチンカイと申します。92年に来日し、難民として日本に来ました。

日本で結婚して、夫は強制送還されまして、2004年に子供を生みました。

2007年、日本政府から特別在留資格をいただいています。

私は高校卒業して、日本に来たので、学校で勉強したいという気持ちがずっとありました。環境が整っていないため、日本語の勉強も、日本語学校に行って勉強することができませんでした。

しかし、在留特別許可をいただいた後に、今後親子二人で日本で定住するためになにか技術を身につけなければならぬと思って、自分で色々調べました。そこで、出会ったのは東京都の職業訓練学校です。その学校を受けようと思いました。しかし、日本人向けの学校なので、私にとって受験をすることがとても難しい。国語と算数と面接という壁が私に待っていました。

そこで、私は以前からお世話になっているさぼうと21をお訪ねして、受験の勉強をしたいということを見つけに、さぼうとで勉強することになりました。



矢崎：受験の結果はどうでしたか？

チンカイ：受験の結果、無事入学することができました。私は小さい頃からものづくりが好きで、エンジニアになりたいと思っているのですが、お陰さまでその技術を日本で身につけることができ、今、日本の会社に就職して、機械の設計の仕事をしています。

矢崎：最初の目標はもう達成されたと思うのですが、学校に入学するという目標、でも今もずっとさぼうと21に勉強に通っていらっしゃるんですね。

チンカイ：そうですね。一つの目標は達成して、それから日本語能力試験1級というのも、さぼうと21で学びながら合格することができました。

しかし、日本社会に出た私にはいろいろな課題が待っていて、今は日本語だけではなくパソコンの勉強もしています。日本の会社で働くのにパソコンができないとほんとに仕事ができないので、パソコンの勉強を続けています。

矢崎：どうですか、エクセルの関数とかは。

チンカイ：う～ん、そうですね、年のせいなのか（笑）エクセルの関数とかはなかなか覚えられなくて、先生と二人で苦しんでいます。

矢崎：先生も苦労してらっしゃるんですね。

チンカイ：はい（笑）

矢崎：ありがとうございます。そうすると、また新しい目標ができて、勉強を続けていらっしやる、ということですね。

チンカイ：はい。

矢崎：先ほどの発表にもありましたけれども、やはり皆さん大人の方は今、さぼうとで日本語の勉強、それからパソコンの勉強もしている方がとても多いですけど、日本語を勉強するということは、長く日本にいらっしやる方々にとってやはり大きな課題で、どうしてもできるようになりたいものなんじゃないかな。

では、チンカイさん、答えたそうな顔をしていらっしやるのでどうぞ。

チンカイ：（笑）そうですね、日本語を勉強するというのは日本に定住していく上で、どこの国もそうだと思いますが、その国の言葉をまず覚えなければ何も始まらないと思います。自分がこうやって自分の意思を続けられるということもまず日本語ができないと続けられないかと思っています。

みんなとコミュニケーションがとれない、情報がまったくわからない、テレビを見てもまわりが笑って、自分一人だけむっとしているのも、すごく嫌な気持ちになります。

なので、まず第一に、生活できるように日本語を身につけなければならないと思います。

矢崎：分かりました。セシリアさんは日本語の勉強をして、ずいぶん生活そのものは変わりましたか？

セシリア：やはり私が日本語を勉強してからいろいろな将来の準備ができたと思います。私は13年間ハウスキーパーだったのですが、ちょっと身体がダメになって、リウマチになってしまって、そのままでは労働の仕事は続けられないなと思って、日本語の勉強をしないといけないと思ったんです。

自分の夢は通訳になりたいということでしたから、できるだけ早く日本語を覚えて、また、私には二人子供がいるのですが、その時は短大に行かせたかったのですが、自分がどういう風に力になれるかも自分で勉強しないといけないと思って、子供たちの良いモデルになりたかったんですよね。

子供たちに。

矢崎：二人お子さんがいらっしやるんですね。その子供たちの良いモデルに自分にならなければならない、と。

セシリア：はい。

矢崎：なりましたよね。

セシリア：今は二人の子供も短大を卒業しました。皆さんのお陰で。

矢崎 : ありがとうございます。

言葉のことだと、越路さんも小学校6年生で日本に来た時に、やはりぜんぜん日本語がわからなくて、どうでしたか？ その当時。

越路 : 私の場合は小さかったので、すぐに友達の輪とかに入ろうと思えば入れるんですけども、親を見ると、親はもっと大変だったと思います。

例えば、先生との連絡帳みたいなのを書かなければならないことがあって、みんな持って行くんですけど、結局、親が書けないということがあって、それを友達と比べられたり、学校で遠足とか行くと、パンフレットをもらえるんですが、読めないの、何を持って行ったらいいいのかとかわからなくて、親はすごく苦労して大変だったと思います。

矢崎 : 今、親御さんは日本語はどうですか？

越路 : はい、多少はできるんですけども。昔よりは良くなっています。

矢崎 : はい、分かりました。ありがとうございます。

そうすると皆さんやはり、言葉というのは日本で定住していくという時にとても大きな乗り越えなければならぬ壁と見ていらっしゃるのではないかと思います。9月の末に第三国定住という新しいプログラムがスタートして、日本にもタイの難民キャンプからミャンマーの方々が新しく日本に定住するためにいらっしゃいましたよね。この長く定住ということをすでに考えて日々生活していらっしゃる、特にお三方の女性から伺いたいのですが、言葉ができればそれで定住というのは、うまくいくというものなのでしょうか。

では越路さん、

越路 : 親を見て思っているのが、多分大人の方というのは自分の国の文化というのが自然に身体に染み付いていて、新しい所に入ると、すぐに慣れないという部分があると思うんですが。国で当たり前前にできることができなくなって、それが劣等感につながって、それが、私が日本に来たのは20年前だったのですが、その当時海外に出て行く日本人も少なかったの、普通のことできないのはバカだ、と思われていたこともいっぱいあったんですけど、そういったプライドなどをあまり見せ付けずに抑えて、住まわせてくれてありがとう、ということをもうちょっとアピールして、最初だけ苦労して、そのあと言葉と日本の文化を身に着けていけば、なんとかやっていけると思います。

矢崎 : そうすると、親御さんを見ていて、やはりプライドというのが時には日本の生活になじむために反対にそれが大変にしていた、ということでしょうかね。でもプライドを捨てろ、ということでもないんですよね。

越路 : そうではなくて、ベトナムの事情がわかっている方だと分かると思うんですけど、私の親はもともと軍隊に入っていて、その戦争で国にいられなくて日本に来たんですけど、その軍隊の上の方に立っている人なので、あまり下の人をお願いすることが慣れなくて、そうするとこっちで言葉が出来なくて、自分の思うようにことがならなく

て人に頭を下げないといけないことがいっぱいあって、それを見ていて辛そうだなと思うんですけど、まあ仕方ないというか・・・。

矢崎：まあ娘としてはその辺をもうちょっと、(プライドを)捨てるとは言わないけれども・・・。

越路：そうそう、もうちょっと抑えてくれればと思います。

矢崎：はい、わかりました。今その意識の問題だと思いますけれども、少し自分の持っているプライドも抑えつつ、日本の文化に触れていくことが大事じゃないかというご発言だったと思いますが、セシリアさんどうですか？日本で、長く住んでいくために、言葉以外でどんなことを身に付けたら上手くやっていけるという気がしますか？

セシリア：やはりみな、今までの経験がみな一杯あると思いますので、やっぱり周りとか環境の関係もあると思い、すごく大きな影響があると思いますが、私の場合は、やっぱり国際結婚で日本に来たんで、やはりそういう生活がすごく色々な不安があるので、日本語の勉強で喧嘩の準備というか、やっぱり夫婦で喧嘩がいっぱいあるじゃないですか、で、やっぱり喧嘩しながら辞書を開いて、なんか自分で何が言いたいのかも分からなくなったんですね。

矢崎：結婚じゃなくて喧嘩ですよ？(笑)

セシリア：そうですね、やっぱりコミュニケーションが通じないからと思って、やっぱり言葉だけじゃなくて心の準備もしないといけないと思うんですよ。やっぱり日本に行っても、みんな外国人がいろいろ苦労していると思いますので、やっぱり戦いだと思いますよね。戦いというのは一人の戦いじゃなくて、自分のやっぱりみんなもっと理解できるようにそういう戦いですね。喧嘩じゃなくて。もちろんそういう為に日本に来るんじゃないから。やっぱり子どもがいるから、できるだけ幸せな生活をさせてあげたいです。

矢崎：そうするとより良い生活というか、快適な生活をしていく為にもセシリアさんにとっても毎日が自分との戦いだったし、心の準備を毎日毎日していった。そんな感じですかね？

セシリア：そうですね。

矢崎：強くなりましたか？

セシリア：前、すごい泣き虫だったんですね。もう本当に20年間やっぱり色々経験して、ここまで来て、すごく自分の今までが変わったと思います。

矢崎：はい、ありがとうございます。チンカイさんどうですか？今、越路さんやセシリアさんからもお話ありましたけれども、日本で定住していくために、日本語以外に何を身に付けていったら、生活が少しでもいい気持ちで送れるんだろう。そのあたりで何

かお考えがあれば教えてください。

チンカイ：日本語を学ぶのも、とても大事だと思いますが、日本という社会で日本人にとって当たり前なこと、私たちにとってはちょっと、当たり前じゃない、言われないと分からないようなマナーっていうんですか？そういう本には書かれていない、法律でもない、そういうものも身に付けないと日本で生活していくのが難しいんじゃないかと思います。

それは私は数年間日本に住んでいて自分で身につけて、覚えてきたことなんですけれども、今回、第三国定住の人たちって言うのは6ヶ月間というとても短い期間で日本語も職業訓練も積まなきゃならないという中で、日本語だけではなく、6ヵ月後に日本の社会に出て行く、自分たちで自立していくということで、とても言葉も大事ですけど、日本の社会のマナーっていうことも、その6ヶ月でできるだけ勉強して覚えていかなければならないなと思います。6ヶ月という本当に短い期間で全部は覚えきれないとは思いますが、そういうのも自分でいつでも緊張して周りを見てみんなどういう時、どうするのかっていうのが学校に行くと勉強で教えられることではないので、そういうのも身に付けておいたほうが、今後日本に定住するためには役に立つんじゃないかなと私は思います。

矢崎：ありがとうございます。

今、越路さん、セシリアさん、チンカイさんがやっぱりいつも緊張してやっていかなければならない、いつも日々戦いというようなお言葉がありましたけれども、越路さんもそんな感じですか？小学生で来日して、毎日がやっぱり緊張した、そんな日々でしたか？

越路：そうですね、特に子どもたちは気遣いというのがあまりないので、先に私これ、僕これっていう、先に言ったもの勝ちなので早く言葉を身に付けないと、遅れてしまう、負けてしまうという部分とかもあって、毎日ががんばってました。

矢崎：今はどうですか？そういう緊張感はずいぶんなくなった日々なんですか？

越路：その緊張感を伝えたいなとは思っています、新しく来た人たちには。

矢崎：はい、ありがとうございます。

えっと、この間のテレビを見てましたら、その、ミャンマーの、ミャンマーから、タイの難民キャンプからいらっしゃるミャンマーの方々が、皆さんやはり子供の教育のために、日本に来るということを仰っていたんですけど、実は今日ここにお集まりの4人の方々は、皆さん、何かしらの形で子供っていうのは、とてもキーワードになっているんじゃないかと思います。

えーと、チンカイさんは今子育て中、セシリアさんは子育て終了？越路さんは子供の時に日本にいらして、そして今、原さんは、えーと主に小中学生の勉強を、見てくださっていますよね。

その、子供の教育っていうのを考えたときに、学習支援室のような場所、さぼると21の学習支援室のような場所っていうのは、何かお役に立てることがあるんじゃないか。

あの一、原さん実際に、あのボランティアとして関わられて、思われるところがあればお願いします。

原 : はい。まあ私はあの、昨年から、えー、高校受験をむかえる、えー、生徒さんや、まあ小学校中学校の、えー、お子さんの勉強を拝見していて、やはり今、あの一、ほかのパネリストの方が仰ったような、緊張感の話や、日本の明文化されてない、えー、マナーやカルチャーっていうものが、特に受験というものは、それを合否とか点数とかですね、非常に厳しい形で、えー、示されると。えー、お子さんが抱えてる悩みや、えー、緊張感っていうのも本当に一緒に、まああの勉強していても、えー、ものすごく感じる状況があります。ま、そういう中で、えー、ほかの日本に受験生とも違う悩みも含めてですね、えー、一緒に感じながら答えを探していくところはですね、私もあの、本職の教職員ではないんですし、ま、あるいは日本で、教鞭を執られている先生もまた、ちょっと違う、ご意見もお持ちだと思いますので、えー、そういう部分は一緒に、まあ答えを探していくような形で、えー、ま、丁寧にやっていくしかないのかなという風に感じることは、特に受験に関しては多いですし、ほかの色々なゴールを、まあ持ってらっしゃる方も一緒だとは思いますが、まあ、加えてお子さんの場合には、日本語を勉強しながら、えー、その教科の勉強もしていかなきゃいけないっていう部分がありますので、そこはすごく、大変だなんていう風に思っています。

矢崎 : 日々お子さんの緊張感を感じつつ、あの一、かつ勉強も教えなければいけないけれども、でもその気持ちも、ね、いろんな話を聞いてあげたいというような

原 : そうですね。はい。

矢崎 : 気持ちになってね、非常にあの一、多分日々悩み多き、ボランティア活動かなと思います。

原 : そうですね。ちょっと未熟な部分も含めて、はい。悩みが多いというのは承知しております。はい。

矢崎 : あの一、お子さんの小学校6年生、中学生になってからですか、越路さんが、あの一、学習支援室の前進の友愛塾で勉強してらしたのは。あの一、何かお役に立ったんでしょうかね、その学習支援室っていうところは。

越路 : そうですね、親が忙しくって、プラス日本語の能力もそこまで、あの一、高くなかったんで、えー、ま、難民を助ける会の方で、その、日本の当たり前のこと、その習慣とか文化とかその普通の学校以外のことを色々教えていただきました。助かりました。

矢崎 : そうですね。お姉さんも勉強に来てたんですね。

越路 : はい。ちょうど姉は受験するときだったので、姉の方がいっぱい勉強してたと思うんですけども。

矢崎 : ああそうですね。じゃ、あの一実際に勉強をしていて、でも今もう社会人になって

会社員としてバリバリお仕事してらっしゃるのを見ると、多分ね、当時あの一、ボランティアで関わってた方がいらしたら、とても嬉しくご覧になるのではないかなという風に思いますけれども。

セシリアさんどうですか。お子さんをもう育て終えたと思いますけど、お子さんの勉強を見る立場だったんですよね。それで、日本語ができないと、その、お子さんに勉強も教えられないっていう、そんな時期もあったかと思うんですけれども、あの、勉強とかでお子さん困っているときにはセシリアさんはどうしてたんですか。

セシリア：まーほんとに、あたしが日本語の勉強で、2年ぐらい、あの一、勉強しててよかったと思いますけど、やはり、あの一、子供に、やっぱりあたしがこの、日本に住んでる時、ただ生活のことだけじゃなくて、やっぱり日本語の勉強が大切と、そういうことを見せたんです。ちゃんと、あの一、例えば、あの一、ほんとに子供たちの、あの一宿題とか作る時もやはり言葉だけじゃなくて、科学とか色々で、私がほんとに、見るとき何すればいいのかわからないので、もう、ほんとにその時、まー、ボランティアたちのおかげで、私の子供たちを、あの、ま、そういう生活をしたんですが。でも私の場合はすごく、やっぱり私の子供たちが日本に来て、まだ中学校のときですね。でやっぱり高校の受験もあるし、あの一大学の受験もあるので、すごく、そこまでできるかなとかすごい不安だったんです。やはり、勉強がやはりあたしのためにやるんじゃないって、お母さんが喜ぶためにでもなくて、自分の将来の準備だと思いたいですから。でも子供たちにどういう風にそういうことを伝えるとかすごく難しかったんです。やっぱり、あの一普通の日本人の勉強と比べて、2倍3倍の大変が、すごい感じました。あたしもあの一会社も休んでしまいましたとか、日記を作ったりとか、もう本当に10日間ぐらい、例えば、なんか2人子供が同時に、あの一受験が、あの一受けるから、もうほんとにそれぞれ、ママあたしの番、あたしの番とか、もう時間が、もう自分のあの、何ていうんですか、自分の時間、自分のためにの時間もないですね。もうすごく大変だったんです。もう、本当に涙がすごかったんです。何回もあたしの子供が、あの、受験受けたんだけど、うまくできなかった。電話で、ママちょっと私が合格できなかったとか。もう本当にやっぱり、あの準備時間が足りなかったんです。それもやっぱり子供たちがもう少し頑張れば良いと思う、やっぱ、まだちっちゃいからその責任感がまだ持ってないと思うんです。お母さんの責任とか子供の責任が違うと思って、でもまだ子供がそこまで理解できなかったんですから、大変だったんです。

矢崎：越路さんは、お子さんの立場で聞いているのか、どちらかわかりませんが、ねえ。

越路：親は大変ですよ。

矢崎：じゃ、今子育て中で、今お子さん5歳の、5歳です？6歳になりました。じゃ、チンカイさんどうですか。子供の教育？

チンカイ：そうですね。子供を育てる、私は今、子供は6歳になりまして、来年小学校にあがります。えー、周りに、周りにビルマのコミュニティの中で、子供を持つお母さんたちがいっぱいいて、それを見ると、やはり日本の教育のあり方は、私たちはあま

り理解していないので、親子たちはけっこう苦労しています。学校での連絡帳を書くということから、大変だった、大変だと思って見ていました。今度自分の番になるのかなと思うと、しかしどうやって準備していくのかはまだ分かりませんが、その時になれば、なんとかなるんじゃないかなという風に（笑）思っています。

しかし私は、えー私の母親は教育熱心で、本当に小さい時からうるさいぐらい、あの勉強しろ、勉強しろっていう風に言われまして、ミャンマーでもいい学校に行かせていただいて、えー今度は私が母親っていう立場になると、やはり、えーと子供にも同じような教育を受けさせたいなと思いました。しかし日本は本当に、えー、学費が高くって、公立は学費がなしでは行けるんですけど、やっぱりいい学校に行かせたいという気持ちがあると本当に難しく、受験とかも、聞いてて、あー自分の国でだったらもっといいところに行かせてあげられるのになという気持ちはあります。

しかし、日本にこれからずーっと定住していくので、ま、その、えーと自分は日本の中でも自分の力でできるような、一番いい教育を行かせてあげたいなと思って今、親子2人でどうすればいいのかっていう風に勉強はしているところです。

矢崎：学習支援室のようなところは何かお役に立ちますか？どうですか？

チンカイ：そうですね、学習支援室というと私にとっては欠かせない所です。日本の社会につなげてくれるような場所であって、私にとってとても大事な大切な場所です。そこで私も勉強しながら、今、息子も連れて、えー勉強を始めさせていただいています。今後も、あの一そのお世話になって行きたいなと思っています。周りにいるえーと、子供が、例を言うと、えーと今高校生になっているんだけども、その子もやはり、えーとさぼうとに通い始めた時はとっても大変だったんで、成績とかも大変だったんですけども、さぼうとの、えーと、支援を受けて、色々な子供の教育を受けて本当に今自分が行きたい高校にも行けたし、今後まあ、その子がおかげで今まで勉強をみる、お母さんが勉強をみる時間がなくて、みてられないというのと、どうみればいいのかわからない、どう子供と接すればこの教育をすればいいのか分からない中で育て、だんだん時間だけ経ってて子供がだんだん大きくなってきていて、でもいざとなってくると、こういう、えーと、さぼうとみたいな支援室に出会って、そこで初めてこの子が勉強ということに面白さを感じていると、私は見てて思います。で、だんだんだんだん、勉強ができるようになって、今度は大学の、再来年、大学なんだけどその準備をしているんですけど、見ていると、いい大学に行けるような、成績ぐらいまで上がってるっていうのを見ると、ほんとに私たちにとってこういう支援室っていうのが、本当に欠かせないところであって、あの一、えーと、子供だけではなく、親たちにも勉強させてくれるようなところだなと、私は思っています。

矢崎：どうもありがとうございます。で、もう、色々お話聞きたいんですけど、あつという間に時間が経ってしまっって、はい、原さん。

原：私、あの自分の悩みだけ、なんか話した感じでなんか終わっちゃったんで、今お話、聞いてて思ったのが、学習支援室が私自身が勉強してきた環境と比べると大きく違うのは、色々な年代の方がですね、同じ部屋で勉強しているところなんですね。私、小学生の生徒を教えているときに、ま、授業の時間が終わったので、今日は終わりだねという話をしたら、まだお母さんが勉強してるから、ということで勉強続けた

いというようなことを言われたと。自分が小学校 2 年生の時に母親が勉強してるから、自分も勉強しなきゃっていう考え方は、状況的にはなかったの、すごく驚いた印象があります。なので、自分が、ま、日本で勉強した時には同年代の同級生なんかと、点数を競ったり色々な勉強したのと比べるとですね、学習支援室って色々な年代の、まあ色々な立場の方が、まあ、先生もたくさんの方がいて、色々な授業を、日本語であったりパソコンであったり、えー絵本を読んでも方もいらっしやる。という中で、勉強ということに関しては非常に皆さんの意識が、近いというか、やらなきゃいけないとか、やるとこういう意味があるんだとか、楽しいんだっていうところはすごくユニークなところとしてお伝えしたいなと思いました。

矢崎 : 文字通りあそこで勉強している方々をつないでいるものってというのは、学びっていうことになるんだと思うんですけども、それはお子さんにも必要だし、決して卒業がない、ずっと終わりのない多分ゴール、常にゴールが先に先にと出来ていくのではないかなという気がしますけれども。

原 : はい。そういう印象を受けました。

矢崎 : ありがとうございます。ではですね、えーとテーマが一応「学習支援室をめぐる」ということなので、今あの一、原さんの方からあの、ちょっと驚きましたということ、あの、場所のこと語っていただきましたが、どんな学習支援室だったらいいなあ。というのを最後に、あの皆さんから一言ずつうかがって、あの一、話の方を終わりにさせていただきたいと思いますが。えーと、じゃあ、越路さん、どんな場所だったらいいですかね。

越路 : 今は、あの一、39 名の先生しかいらっしやらないですけど。

矢崎 : あ、もうちょっといらっしやるかも・・・

越路 : はい。あ、もっといらっしやるんですか。で、まだまだ勉強したい方が、いっぱいいらっしやると思うので、もう少し、あの一広い場所でいろんな方々、勉強が・・・

矢崎 : 場所は結構広くなったんですけど、ちょっと余ってるので、人がちょっと足りないですかね。

越路 : えっと一、あとはですね、あの一、その一、知識だけじゃなくて、ま、その私たち、普通にあの社会人としての、物質の面とかも、もしあのいらんようなものとかがあって、その辺、ま、普通の学校で、こういう広告が、こういうものいらんので、必要な方いますか。とかそういう、ところとかあの、知識プラス物とか、その辺のシェア、できるような感じの学校だったらいいなと思います。

矢崎 : じゃ学習、学びのシェアだけではなくて、色々な物も心も、こうシェア出来ていくというか、共有できてく場所だといいなということですよ。なんか特別な場所ってなんかこう堅苦しい感じで思われる方とかね、あと、あの学習支援室にお世話になっているってようなお気持ちを、なんかすごく強くお持ちの方もいて、私としては

ちょっと、うーん、どうだろう、と思う時あるんですけど、どうなんでしょうね、その、ボランティアさんには非常にお世話になっているから、なんか、文句言っちゃいけないわ、とか。

越路 : えっとですね、ま、今日のその一番大きいテーマで共生社会を成功させるのに、その私が思うに、「優しさ」っていうのがキーワードかと思うんですけども、その一、優しさ、みんな、皆さん一人ひとり持っていると思うんですが、どういう風に人に伝えたらいいのかっていうのは、きっかけっていうものが、あの一、ないとそれを伝えられなくて、そのまま胸に閉じ込めてしまう方とか多々いらっしゃると思うんですけども、学習支援室っていうのは私にとって一つの場、自分の優しさを人に与えてあげられるもの、と、あと受けるものとして両方もらっているんで、あまりこう、上目線とか下からこうやっていただいているとかそういうもの、そういう場ではないと思います。なので、皆さんなんか、きっかけ、さぼうと21でもいんですけども、何かきっかけを探して、その優しさを周りの方に分けてあげられれば一番いいと思います。

矢崎 : ありがとうございます。セシリアさんどうですか、どんな学習支援室があったらいいな。

セシリア : やはり、私の場合は、あの、やっぱりあのボランティアの方はやっぱり色々なボランティアグループがあると思いますので、やっぱりもっとオープンにして、あの一、みんなにやっぱり情報が大事だと思いますね。やっぱり、あの一、もっと宣伝してほしいんですけど。そういう、やっぱりあの私たちがあの、日本に来る前に何にもわからない、がいっぱいだと思いますので、こういうボランティアグループの存在が、やっぱり、あの一、ま、最近だけ聞いたので、もう本当に何年間も苦労してたのに、このボランティアグループがあるのかも全然知らなくて、やっぱり情報がちょっと足りなかったんですね。も本当にみんな、やっぱりギブアップなっているので、あの一、やっぱりうまくできなかつた人が結構、あの一、いると思いますが、やはり、そういう、あの一、みんなやっぱりこのボランティアの存在だけじゃなくて、やっぱりそういうあの、外国人のために、も本当にあの色々やってもらったので、本当に助かったと思いますが、でも、やっぱりできるだけ一日でも早くそういう情報が、私たちのためにわかるようにとか、あの一、ま、もちろん、みんなボランティアだから、本当にそういう優しい気持ちがすごく感じると思います。あの一、本当に自分の時間で私たちが、あの一私たちに、あの一そういう時間をあげて、やっぱり、あの一、そういう時間がみんな私が簡単に取っているんじゃないかって、みんなやっぱり時間が大切だと思いますので、その、そういうこともやっぱり、あの一、私たちもお返しできるように、とか、私みたい、ま、20年間色々経験したり、区役所に行ったりとか、住宅の方とか、もう、本当に私が友達とか、都営住宅の方にも、あの一私のおかげでちゃんと入るようになったんですけど、手続きとか、やっぱりそういう、あの一みんなですらそういう目的……。

矢崎 : そうすると、お互いの大切な時間というのを、優しい気持ちを共有し合うために、一緒に出し合っていけばいいじゃないかっていう、そんなことでしょうかね。ありがとうございます。

そうすると、別にあの、支援してるとかされてるという関係ではなくて、みんながそこに集まる場所、という風に捉えていけばいいのかなと思いますけども。

じゃ最後になりました、チンカイさん、一言でシメの言葉をお願いします。

チンカイ：一言で、ですか。えーと、学びたい人には学べる場所があるというのが、とっても大事だと思います。しかし、あのう、私が感じていることは、学びたい人がたくさんいて、それにみんなにお答えできないという状態、状況があるかと思います。ま、初めて私たちがさぼうとにいた時に、本当に狭い場所で5階だけで難民を助ける会の事務所まで借りてやったんだけど、今場所が3階になって広がっているので、えーと、たくさん学びたい人、学べるようになったかなと思います。

ただ、えーとボランティアをする方々がもっと増えれば、その問題は解決できるんじゃないかなと、私は思います。そのために、えー、遠くからもいらっしゃる人もいれば、この目黒っていう場所の近く、えー、からいる人もいて、遠くから来る人もいるので、そう一つの場所にこだわらず、こういう支援をしてくれる、えーと学習教室が、いっぱい出来て、いくつもあるといいかなと私は思います。そうするとみんな、えーと、それに大事なのが、えー、学びたい人がたくさん、もう私も日本語学びたい日本語学びたいというのが私の周りもたくさんいますが、えーと、教えてくれる、サポートしてくれるボランティアの先生方がちょっと不足しているところであって、うーんと、そういう、えーと、こういうボランティアの場があるよっていうのもっと宣伝していくと、えー、いいのかなと、私は思います。そうするとみんなの期待にも応えられるしお互い、えーと、いい関係を作って、日本に来て日本で勉強ができて、それから、えーと、学びたい人にも学べるし、あの、ボランティアをしたい人も、情報がなくてボランティアに参加できない人もたくさんいると私は思いますので、そういうところを、もうちょっと増やしてくれると、とってもいいんじゃないかなと思います。

矢崎：まだ言い足りないようですけれども、あの、今のお話にあったように、さぼうとでも今、場所の問題はかなり、あの、克服されてきていますが、もっとボランティアの方々に来ていただいて、今ウェイティングリストにある方が20人、常に20人ぐらいいらっしゃる状況で、やっと一年待って勉強できました、なんていう人がいるような状況で、それは全然いいことではないと思っているんですね。勉強したい時が勉強する時だと思うので、そういう場所がすぐ提供できるように、さぼうと自身もそうですけれども、今、仰ってくださったように、そういう場所が、色々な場所にたくさん生まれて、そして、あの、セシリアさんもチンカイさんも仰ってくださったように、その情報がもっと、あの、日本に住む、定住しようとする方とか外国出身の方々にきちんと届けられるような、努力というのを私たちもしていかなければいけないと思いますし、同時にボランティアしたいのに、その場所がわからないという方もいらっしゃるかもしれないので、そういう意味では、今日のような、あの、このイベントを通じて多くの方にこういう状況を知っていただく、そういう努力もまたしていきたいなという風に思います。

あの、すいません、もうすっかり時間をオーバーしておりますけれども、あの一、今日は4名のパネリストのみなさん、あの、お忙しい中、えーと、打ち合わせも含めて、あの、たくさんのお時間を使ってくださいました。あの、皆さまから、もう一度、あの、4名のパネリストの方に拍手をお願いできればと思います。

(拍手)

【第二部・総括・川上郁雄先生】

川上 郁雄(かわかみ いくお)

早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。専門は、日本語教育、文化人類学。

「日本国内外の年少者日本語教育学および移民・難民・diaspora 研究」を研究課題とする。



(高橋) 皆さま、どうもありがとうございました。あの、貴重なご意見を頂戴致しました。では、ここで、早稲田大学大学院日本語教育研究科の川上郁雄先生に只今のパネルディスカッションの内容を受けて、総括をお願いしたいと思います。川上先生お願い致します。

(川上) 早稲田大学の川上です。今日は、第Ⅰ部からたくさんのご発表もあり、また歌もあり、そして最後のパネルセッションもあって大変盛り沢山でした。大変貴重な経験、貴重なご意見をうかがって、色々と考えることが沢山あったと思います。

今日の全体のテーマは共生社会の実現に向けての現状と課題ですが、中心的なところ、そのキーワードは、学習支援サポート、あるいは、さぼうと21の学習支援室をめぐって、議論が進められてきたと思いますので、その点に、触れながら話をしたいと思います。

冒頭に、吹浦理事長からもお話がありましたけれども、第三国定住プログラムがスタートし、新しい時代に日本が入っているわけです。そういった意味で、難民の方とか、あるいは外国から来た方々への、私たちの支援といったことを考えてみますと、その支援には大きく分けて、3つぐらいあるかと思います。

一つは、経済的な支援ということだと思います。これは、国や国際機関や、あるいはNGOなどが、経済的にそういった人達への支援を行うということだと思います。すでに、さぼうと21の方から奨学金の話もありましたが、それもその中に含まれると思います。

もう一つは、社会文化的な支援だろうと思います。それは教育とか医療とか、あるいはこういった方々が地域社会に生活していくときに必要な情報を、あるいは技術などを提供するという支援だろうと思います。

そして、三つ目は、非常に重要だと思うんですけども、そういったことと絡みながら、精神的なサポートですね、精神的な支援をしていく、あるいは心のサポートをしていく、という点ではないかと思います。

また、今後の課題は何かということを考えますと、この三つの中に、皆さまがもうすでに、日々実践されたり、活動されている中で、感じてらっしゃる課題が入っていると思いますので、あえてここではその課題について整理していくっていうことは時間的に無理なので、今言った三つの支援の中に、これから考えないといけない支援があるということだけは、共通理解を持っていきたいと思います。

そこで、今日、私が与えられた仕事は、この学習支援室の意義と言いますか、あるいはパネリストの皆さんの話し合ったことを踏まえてコメントをするということなので、そのほうに話を進めたいと思います。

学習支援室という場所は、先ほど、チンカイさんが日本の社会と繋がる場所だとおっしゃいましたが、その点が非常に重要な点ではないかと思います。つまり、この学習支援室というのがすでに日本の社会と繋がる重要なものとして、利用した人達に認識されているということだと思います。ただ、私たちは、学習支援室の成果はもちろんですが、改めて考えたいところは、「さぽうと」という名前がついていますように、「支援」なり「サポート」といったことが何なのかということだろうと思います。

サポートはヘルプ、つまり助けるという意味ではないと、私は思います。この、サポートというのは人々が主体的にそして自立的に生活できるように力を貸すことではないかと思います。人々が主体的にまた自立的に生活できるといったことは、先ほどモーさんが発表の中で仰っていましたが、それぞれ一人ひとりが違う生活や違う人生、人生観を持ちながら生きていける、ということ踏まえたうえでのサポートだろうと思います。つまり、こういった方々が、日本人と同じように生きること、あるいは、日本人と同じようになることを私たちが支援するというのではなく、その人たちがその人らしく生きていく、あるいは、そういう生活ができるようにすることに、私たちが力を貸していくということではないかというふうに思います。これがまず、学習支援室の一つの視点と言いますか、観点として重要な点だと思います。

二つ目の点は、学習支援室でサポートする人というのは、サポートを受ける人が、何を求めて、あるいはどんなことをしたいと思っているのか、ということ考えながら力を貸すという点だろうと思います。つまり、決められたプログラムがあって、それを、来た方に順番に与えていくというサポートではなくて、そこに来ている方々は、今日もすでに話がありましたように、子どもから大人まで様々な方が関わってらっしゃるわけで、そして、そこに来ると人達が色々な人生を持っている、あるいはいろんな生活の課題をもっている、ということ踏まえて、その人たちが主体的に、そして自立的に生きることがどういうことなのかを考えながら力を貸していく、という点だろうと思います。

そして、それは、必ずしも最初から分かるということではなくて、支援室で支援をし続ける、あるいは何かを教えていくとか、一緒に活動する中で徐々に分かってくることであって、最初からわかることではないかもしれませんが、私たちはそこに関わる場合にそういったサポートを受ける人達が主体的に自立的に生活するために、その方が何を求めているか、何を考えているかということ支援する側が考え続けるということではないかと思います。これが二つ目の点です。

三番目は、先ほどもうすでにお話があったように、サポートを受ける人とサポートをする人というような関係性ですね。その関係がはたしてそういうふうに分けられるものなのかということなんです。今言いましたように、支援室の活動は、支援を受ける人と支援をしようと思って来る人達が、お互いに何を求めてどのように生きていくかということ相互に探り合いながら、そして理解し合いながら、お互いに何ができるかということ

を日々考えている、そういう活動だろうと思うんです。つまり、支援を受ける側が支援する側を理解したり、支援する側が支援される側を理解したりというお互いに理解し合う関係になっていくわけですね。それで、そうなった場合はもう、される側とする側という関係がなくなって、お互いの中で関係を一緒に作っていくという、相互に構築していく関係性が生まれてくるんだらうと思います。そうするとそれは国籍や、今までの背景といったものを越えて、共に一緒に生活している人達が、お互いをどのように理解するかということに焦点化されていくんだらうと思います。この点が非常に重要な点ではないかと思います。

こういうことをお互いに理解し合いながらお互いにどういう関係を作っていくのかということ、日々の実践の中で考えていることが、今日の発表会の中にもたくさん出ていたのではないかと思います。さぼうと21がこれまで、長い期間活動なさってきた、その成果がそれぞれの発表やあるいは、受講生の、元受講生の方々の話の中にずいぶん現れていたのではないかと思います。つまり、私たちが、お互いに相手が何を考え、どういうふうにしたいと考えているか、主体的に自立的にどのような生活をしたいのかをお互いに考えながらやっていく、活動していくという、そういう営みというのは、実は共生社会の中の一番基本的な点ではないかと思います。つまり、それは、日本人側から支援する、外国人の方は支援を受けるという関係を越えて、私たちは共にお互いを理解し合いながら、そして、生きていくということをお互い考えていく、そういう活動なのではないかと思います。

その点を、私は、さぼうと21の学習支援室に関わる皆さまのお話を伺いながら改めて感じたところです。

簡単ですが、総括としたいと思います。どうもありがとうございました。

主催… 社会福祉法人 さぼうと21 

共催…  UNHCR (国連難民高等弁務官事務所)
The UN Refugee Agency

協力… 認定NPO法人難民を助ける会 早稲田大学大学院日本語教育研究科

助成… 平成22年度 日本郵便年賀寄附金助成事業



2010.10.16

社会福祉法人 さぼうと21

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズビル5F

TEL : 03-5449-1331

FAX : 03-5449-1332

E-mail : info@support21.or.jp

URL : [http:// www.support21.or.jp](http://www.support21.or.jp)